



第2章

こうしてヨナは、鯨に飲み込まれてしまった。幸い鯨は噛まないで流し込んだので怪我をすることなくその腹の中に入りました。しかしそこは真っ暗闇で、息苦しく、蒸し暑く、ひどく酸（す）い匂いがして、激しくせきこみ、吐きもしました。ただ、なぜか窒息することはなかった。たくさん海生動物が九死に一生を得ようと必死にうごめいており、彼の服に入り込んでくるもの、足や腕や顔の皮膚に吸盤で張り付いてくるものが出て、ヨナは悲鳴を上げ、もがき、何かに足指をかまれた時には蹴飛ばしてむずがる子供のように泣き叫んであばれまくりました。もう生きた心地がしません。

やがてせきに妨げられながらもヨナは神に必死になって声を張り上げて祈り始めた。しかし酸性の空気が彼ののどを痛めつける。のどが渇き、ついに声が枯れて音が出なくなった。ヨナは口ばくでまだ祈り続ける。突然耳鳴りが始まった。すると多くの思い出が次から次へ彼の脳裏を駆け巡り始め、やがて長い間記憶から失われていた幼年期の思い出が今現実に行っていることかのような鮮明さでよみがえってきた。彼は祈りをやめ、幼年期のシーンを追った。あるシーンで彼は両親に連れられて神殿に来て、その荘厳さに目をうばわれている。母がいけにえのための小さな鳩を一羽彼に持たせてくれる。それは飛べないように羽がしばられていた。彼はそれが殺されるのがかわいそうではなそうとしない。ついにその鳩が殺され丸焼きにされるのを見て泣きじゃくる。両親は笑い、父は彼を抱き上げ、接吻し、肩車してあやしてくれる。背の高い父の肩の上にいるといつも誇らしい気持ちになる。「アミタイさん、かしこそうな顔した息子さんじゃのう」だれかが言う、と父は大声で笑いながら「顔だけですよ」と言う。次のシーンでは少年ヨナがかけっこで先頭を切って走っている。ゴールの向こうで彼の父母がうれしそうに応援している。次の瞬間にめぐり来たのは彼の両親が家の中で二人の掠奪者にこん棒で殴り殺されるシーンだった。「お母さん！」少年ヨナが叫んで失神する・・・「お母さん！」預言者ヨナも叫ぶ、が、のどに鋭い痛みが走っただけで声にならない。と、トビウオがはねて彼の顔面を打ち、ヨナは失神、そして夢の中で声を聞いた。

「ヨナ、あんたもお神（おかみ）に背（そむ）いたとね。おれもやけん。」それは快活で若々しいテノール声だった。「おりゃあんたを飲みとうはなかったとよ。あんたらサル系は骨ばっていて肉も筋（すじ）が多くて硬くてまずくて消化にもよくなか、しまいには便秘もする。おかげで

この若さで黒便が出たこともあるとよ。おれらマッコウクジラは元来小魚やエビなどの群れを食って育ってきちよる。いくら図体（ずうたい）が大きいからって大きなものはあんまり好（す）いとらんとよ。見ててわかったと思うが、歯も下あごのほうにしかついとらんと。だからたいていのもんは丸呑みすつとよね。まあダイオウイカはけっこう食うよ、でもあれらはあんたら陸（おか）もんと違って柔らかくて実（じつ）はとてもスリムなんだ。つるつとのどを通る。そげんわけで、お神からあんたを丸呑みにしてこいと言われたときには、まっぴらごめん、とこの地中海から逃げ出して、お神の目の届かないところに行こうとしたとよ。

「ばってん、このざまよね。水門を出たとたんに真っ白にされてしまったと・・・それをどうして知ったかって？そりやおれにくっついてるコバンザメたちが、びっくらこいて教えてくれたとよ。「これじゃあ、おれたち目立って仕方ねえ」ってね。それからの難儀ときたらないね。まずご婦人方が寄って来なくなったね。こう見えてもそれまではいやというほど別嬪（べっぴん）が寄り添ってきて、時には寝る暇もないくらい忙しかった。『ちよいと、あたしやあんただけが頼りなんだから、ほかの女と浮気なんぞしちやいやよ』なんて耳元でささやいてあっちをつねっていた面々が、おれが白くなったとたんに、『ありや神様だ、おおこわ』なんて勝手にさわいで、寄り付かなくなったとよ。まあそんなことはいい、嫉妬深いご婦人方にあれやこれや嫌気のような叱責や小言を言われてうんざりして過ごすよりは、気の置けないコバンザメたちとのんびり過ごしているほうがよっぽどいいさ。あれらはね・・・ま、あれらの名誉のために言っておくと、おれにくっついてただ只乗りしちよるだけじゃないとよ。おれの体に付く寄生虫なんぞの有害なものを食ったりして取ってくれ、念入りにスキンケアをし、毛づくろいもしてくれ、おまけにおれが寝ているときには見張り番をしてくれる、そしてなんといっても熱心な話の聞き手であることがうれしいね。ご存知のように、おれたちマッコウクジラは、お神がこしらえたすべての生き物のうちでも一番大きな脳を持つちよるとよね。だから必然的におれたちは最も優れた思考家であって、毎日飽くことなく思索にふけり、偉大な思想をいくつも作り出しちよるとよ。だけどせっかく作り出しても自分の中に閉じ込めておくのはもったいないばい。そこでこれを世の中に広めるためには聞き手が必要なんだ。しかしほとんどの生き物は我々の高尚な哲学や純粋文学には興味を持たないんだな。尾ひれがついて面白おかしくなったゴシップや荒唐無稽で矛盾だらけの作り話に興をそそられて、真実を見つめようとはしない。ところがコバンザメたちはちがうね。あれらは、名前に恥じず、値打ちのあるものと無いものとの違いが分かるんだ。だからおれたちの話にはめっぽう愛着を抱いて離れようとしな。なかんずく、今おれがあんたに話しちよるようなノンフィクション物語には貪欲で、こちらがもう話すネタがなくなるまでおねだりしてくるとよ。一説によると、コバンザメに吸盤ができたのは、話を一言も聞き漏らさないようにとの熱心さのあまりおれたちクジラのからだに耳を一時も離さず押し当ててる姿がお神の心を動かしての結果だというのだ。つまりあれはコバンザメの耳が進化したものらしいんだ。そういえば、おれたちだって呼吸しやすいようにと鼻を頭のとっぺんにもってつてもらったんだ。

「さて、話をもどすと、こう白くなってしまったらおれは敵どもにおいでおいでをしちよるようなもの。北極や南極・・・と言ってもあんたにはわからんやろうが・・・まあ雪と氷に囲まれたところにいる分には白は保護色として役に立つが、ここじゃ大変なハンディだ。天敵がおれをすぐ見つけてわんさとやってくるようになったとよ。初めはカモメが一羽二羽とやってきて、とがったくちばしでつつきやがる。カキや貝類をあさっている間がいいが、味を覚えたやつらはおれらの皮膚を破って肉まで食う。痛いなのって、背中が傷だらけでこぼこ。子供の鯨はそれで死ぬことだってあるほどあくどいとよ。それでしょっちゅう潜らざるをえないので、ゆっくり好きな日光浴ができなくなったと。目玉をつつかれたら、おしまいだから昼寝もできやしない。

「だけどほんとに危ないのはシャチだね。5匹くらいなら打ちのめしてやる、それ以上なら逃げるの一手だ。あいつらはチームプレイに長（た）けていて、腹が減ったら獰猛なサメでもやっつけて食っちゃうからな。こないだ10匹できおったと。最初、うしろから5匹きているなど気づいて、しっぽで痛い目に合わせてやろうとわざとのろのろ泳いでいると、前で5匹が待ち伏せしてやがった。これもパトロール役のコバンザメが教えてくれたと。あれらは本当に名前負けしない役に立つ連中たい。それにひきかえシャチは狡猾なげす野郎どもたい。やはりこちらが白くて目立つから、彼らに作戦を立てやすくさせたのだろう。さて、やつらは散らばっておれを囲もうとしてきたので、急いでもぐった。やつらはおれらより三倍以上泳ぐのが速いからここはもぐるの一手だ。幸いやつらは深くはもぐれないんだ。たいてい300メートルくらいであきらめる。だからそれまでの勝負だ。おれは1100メートルはいける。いところで、3000メートルいったのがある。そのへんでは生き物たちは光を放つので、明るい星空を見ているようだって、流れ星よろしく走るのもいてさ。

「さて、おれは必死でもぐったが、一匹がついに尾ひれに噛み付いた。おれは体を二つに折ってから、勢いよくばねをきかせて尾ひれをフルスウィングした。これで気絶しないやつはたいしたもんだが、こいつもやはり気絶したらしく、ふっ飛んでいった。これができるのは一匹までで、二匹に同時に噛み付かれたら、さすがのおれも振り切れず、負けてしまう。それでおれは必死で逃げたさ。そして水深200メートルくらいからはおれに有利な生理現象が起きるんだ。そのあたりはもう水温がえっと低くなり、おまけに水圧が高くなるので、おれのからだ、特に柔らかい大きなおでこがぎゅっと圧縮されてしだいに流線型になって固まるんだ。で250メートルくら

いの深さでは体積が減るおかげで浮力が体重に比べて相当小さくなり、スピードアップできるんさ。そうになったらもうこっちのもん、こうしていつものように逃げ切れた。しかし上では、やつらは相当長い間待ち伏せしていて、こちらがもういいかと思って上がっていくと、今度は息継ぎをさせまいと交代で上から体当たりをしてきて、おぼれさせられるんだ。だからしばらくは上にはいけない。ま、おれたちは2時間くらいなら平気でもぐっていられるんだ。もぐる前に深呼吸を十分繰り返しておれば、3時間近く辛抱できる。いずれにしても楽に上昇するためには、浮力を回復させなくてはならないのですぐ上に戻ることはよっぽどの理由がないとしない。さて必死でもぐった運動のせいで体内温度が上昇し血の巡りもよくなっているのでおでこからゆっくり解凍され膨（ふく）らみ始めるんだが、温泉に行けば手っ取り早くできる。それにおれは大の温泉マニアなんだ。温泉を見つけるのはたいして難しくない。たいてい泡が出ていて、遠くなければその音を聞き分けることができる。小さな谷間にいいのをみつけたんで降りて行って岩々（いわ）の間に体を休めたとよ。勢いよく湧き出る泡と湯はからだをマッサージしてくれてとても気持ちよか。冷えたからだを芯まで温めてくれる。体を回してカモメとシャチから受けた傷口を丁寧に湧き湯と泡に当ててやった。こうすると傷口が消毒され、早めに治癒するとよ。そうしているうちに、いつものようにうつらうつらしてきて眠ったとよ。

「いつもなら安眠を妨げられることはないんだが、今回は事情が違っていた。大蛸（おおだこ）に見つけられたわけよね。白くなけりゃ簡単には薄暗い中で見つけられないんだが、なんせこっちは雪のように白くて、海の中にや雪などあるはずがないから、やつこさんすぐにえものだとわかる。たこは特に白いものに食欲をかき立てられるそうなんだ。そいで抱きついてくる。これがやばいとよ。あいつらの足に抱きつかれたひには身の破滅さ。どんなにもがいてもだんだんきつく、しかもらせん状にねじるように締めてくるんだ。だから魚やサメはそれで気絶してしまう。それでもものたうっているとやがて唾液を皮膚に流し込まれ、それが麻酔の作用があるから次第に感覚がなくなって気持ちよくなっていく。そしてあの硬い口ばしで少しずつ食われていくとよ。痛くないからこちらはあばれないんだ。やつこさんゆっくり味わいながら食事ができるわけだ。これでおれもいよいよ一巻の終わりかと思ったとよね。しかしよくよく見るとこのたこは足が少ないんだ。どげんしたとね、と聞いてみると、自分をののしりながら言ったと、『腹あ減っちゃまって自分で半分食っちゃまっただ。なさけねえ！』つまりこのたこの八ちゃんは、実はたこの四ちゃん（よっちゃん）だったわけだ、ははは。これならおれだってなんとかかなると気合を入れて岩にこのたこ坊主をこすりつけながら猛烈にあばれてダッシュしたとよね。するとまんまと足がゆるんで外れたと。逃げていると、うしろから『やい、逃げるのはいいが、わしのその大切な足をおいていけ！』と四ちゃん（よっちゃん）はいきまいたが、おれは振り返らず、ちぎれておれの腹にまるでコバンザメのようにへばりついてのたくっているたこ足一本を、こりゃあ上で待っているコバンザメらにいいお土産（みやげ）ができたわい、それに次の冒険物語が真実であることの証拠ともなる、と付けたままおさらばしたね。聞くところによると、たこの足はまた生え

てくるそうだから、三っちゃん（みっちゃん）もそのうちまた八ちゃんにもどるんさ。

「さあ、さすがのおれもこれで回心したとよ。お神に背（そむ）いてよかことはいっちょんなか。内海（うつみ）に急いで戻って、言われたとおりのまいさんを飲み込むためにこっちにやってきて、そいでごらんのとおりの飲み込んださ。でももう後悔さ。案の定、胃がもたれるわ、胸はむかつくわ、はきけはするわ、言わないこっちゃんない、はじめからお神にはそぎゃん言っとたどにね！

「え、どうして自分はクジラの胃の中で窒息しないのかって？その説明は簡単だが、あんたに理解できるかな？・・・ま、せっかくだから頭を振り絞ってできるだけわかりやすくかみくだいて話してあげよう。まず、我々の胃は四つの部屋がつながってできているんだ。今あんたがいるのは一番前の前胃（ぜんい）というもので、ほかのよりずっと大きい。ここでは消化液はほとんど出ない。だからそこにいる限りあんたは消化されないんだ。漬物みたいにはなるけどね。そこは大きいので骨ばった獲物（えもの）を粉碎して消化しやすくするためのものなんだ。もちろん今はあんたを預かっているから粉碎運動はしていないさ。・・・あ、ところであんたの周りにはいる小魚や海草はうまい具合に漬かってきているところだから、よかったらご自由におあがりください。

「さてご存知のように、われわれマッコウクジラはいろんな理由で長時間深海にもぐることであり、そのため酸素をできるだけたくさん体内に取り込む必要があるんだ。それで肺の機能が高度に発達していて、吸い込んだ空気中の酸素のうち80から90パーセントを血液に取り込むことができるようになっている。これはあんたらの10から15パーセントに比べてもわかるようにけたはずれに優れている。だからいわば酸素の食いだめができるんだ。それでわれわれクジラは深海に長く潜るときは何回も深呼吸をしてから行くんだ。また海中で浮力を下げるために体積を減らすべく我々のからだは収縮しやすくできているんだ。すでに述べたおでこがその例で、ほかには例えば肋骨が柔軟なので水圧を受けると胸がへこみ肺が圧縮されて細くなるようになっているんだ。この体積の縮小に応じて新陳代謝が減速し、同時に心拍数も二分の一になり、酸素が消費されるスピードが低くなる。またできるだけ多くの酸素を体内に保持すべく、酸素を貯蔵する役割を果たすミオグロビンが他の動物に比べてかなり濃密に筋肉等の細胞内に存在している。さらに我々の血液は酸素を運搬するヘモグロビンを内蔵する赤血球も過密に存在しているんだ。つまり動脈においては酸素が一時的に過飽和の状態では血液の中に存在しているんだ。そして長い時間潜っていて血液中の酸素の濃度がある程度低下してくると、血液は、機能が停止すると生命の存続にかかわるようなより重要な器官に優先的に送られるようになり、そのため、そのような器官は他の部分より長く酸素濃度を高く保つことができるんだ。そしてあんたのいる前胃には最も

優先的に血液が送られるんだ。脳よりも優先されちよるとよ。その理由は、おれたちは、例えば敵に襲われたときに、生まれてまだ間もないクジラの子を一時的に前胃に飲み込み、戦いが終わるまで保護するんだ。で、窒息させないために前胃の中に酸素を発生させるべく血液を送り続けるようになっているんだ。だからたとえ親が脳死状態になっても心臓が動いている限りは前胃には少しずつだけ酸素が供給され続けるんだ。だから子は親が死んでも酸素がなくなるぎりぎりまでその体内に潜（ひそ）んでいれるので、生存できる確率が高くなるわけだ。ちなみに餌をとるために深く潜るときも、胃に入れるんだ。そして餌を飲み込んだら子供がそれを食べるという一石二鳥ということになる。そういう時には、子供に危険の少ない小型のイカ類を選んで飲み込んでやる。というわけで前胃には血液が最優先で送られるんだ。その血液が胃壁の粘膜を介して弱酸である胃酸と二酸化炭素とに接触するときに、過飽和状態で存在していた過分の酸素が分離し粘膜を通して発生するといわれているんだ。こうして前胃の中の雰囲気は長時間にわたり所定の低レベルの酸素濃度を維持するんだ。まあそのへんのところの化学反応は完全には解明されていないが、とにかくそんなあんばいで、あんたも窒息しないでいられるんさ。・・・あうっ、いけね、また吐き気がしてきた。いわんこっちゃない。このままじゃ目的地に着くまでにあんたを吐いてしまうばい。兄弟、なんかよか胃ぐすりもってなか？あつたら少し分けてくれんね」

などとヨナは夢の中で声を聞いた。この声は延々と続くのですが、それを全部しまいまで書いていると、ヨナと同じようにこの物語もこの鯨に飲み込まれてしまい、クジラ物語に変わってしまいそうです。ちょうど切りがいいのでここで切り上げて本題のヨナ物語に戻しましょう。なおこの声は、夢の中でヨナが聞いたものですから言うまでもなくその内容の信憑（しんぴょう）性は不確かであり、読者の皆さんがこれを鵜呑みされると、かえって鯨飲されかねませんのでご注意ください。酒は呑んでも飲まれるな、のたとえの通りです。

さて目が覚めるとヨナは鯨に飲み込まれたのまでは夢でなかったのを知り、心を痛めます。しかしその心にはいくぶん平和が戻っていました。暗闇の中では自分がどのくらい眠っていたのか、もちろんわからない。ただ、うごめく魚類や軟体動物のうち化学反応により燐光を放ち始めたのがあちこちにいて、その光でうっすらと周りの様子が見えるようになっていました。彼はより動物らにまわりつかれないところを見つけそちらに移動し、再び口ぱくで祈り始めた。

ヨナが鯨に飲み込まれて三日の後、神はヨナの祈りを聞き、鯨に大いなる吐き気をもよおさせた。それで鯨はまだ胃に残っていたものをいっきに吐き出した。こうしてヨナは他のルームメイトたちと一緒に鯨の口から海に吐き出された。

ヨナは泳ぎを知らないので溺れると思った。しかし一瞬のうちに彼の体は温かい風を感じつつ柔らかい地面に落ちた。あまりにも長く暗闇にいて、突然陽光のまぶしさの中に吐き出されたので彼はしばらくは目を開けられないでいた。それで何が起こったのかわからない。

薄目をやっとのことで開けてあたりを見ると、なんと彼は二つの高くそびえる透明な壁のあいだにいた。これらは垂直で互いに平行に立っていて、壁の向こうには幾種もの魚や他の水生動物がたくさん泳いでいるのが見える。壁面は氷のようなものでできている。上を見るとこれらの壁の上縁に挟まれた雲一つない細い青空がくっきりとして延びている。自分のところで海が二つに分けられているのだ。彼が横たわっているのはこの二つの壁のあいだを延びる砂地の通路で、それは緩やかな上り坂になっており、その果てには砂浜と緑の草地とが垣間見えた。またこの通路は自分のいるところで終点になっていて、ここで壁は最も高くキリン二頭分はあろうかと思われる。ヨナのまわりでは幾多の水生動物たちが砂の上をぴんぴん飛び跳ねている。これはかのモーセの海底の道に似ているぞ、

と思ったのもつかの間、ヨナは右手の壁の中に全速力で自分のほうに接近して来る巨大な白鯨を見て思わず身構えた。身震いがしてきた。もう飲まれたくはないぞ！と思った。見る見るうちにヨナの斜め頭上に来た白鯨は勢いよく壁を破り出で、一瞬神々しい全身を宙に浮かせたかと思うと反対側の壁に突入した。すると二つの壁は破られたところから崩壊し始め、海水がみるみる通路に流れ込み、すぐにヨナのいるところは水浸しになった。あわてて彼は立ち上がり、一目散に砂浜を目指してかけた。

海藻が彼の裸足（らそく）に絡み、柔らかい砂地にも足をとられ思うように走れない。水生動物や岩を避けて走ったが、ついに彼はクラゲを踏み滑って倒れた。滑ったほうの左足がつって起き上がれない。後ろを見ると水壁の間を大きな波が勢いよく押し寄せてくる。もうこれでおしまいだと思った。しかしその時、彼が通り過ぎてきた岩のひとつが動いているのに気づいた。よく見るとそれは大きなウミガメがあおむけになって砂地の上に転がっているのであって、何とか起き上がろうと四本の足と頭とそれに尻尾とでもがいているのであった。ヨナはすかさずそこまではってゆき、力をふりしぼってこれを起こしその大きな甲羅にきつく抱きついた。その瞬間、押し

寄せてきた大きな波が彼らを飲み込み激しく回転させた。ヨナは必死にカメにしがみ着いた。そしてウミガメはやがてヨナを乗せたまま泳いで浮上し、押し寄せる波々（なみ）に乗って、砂浜までヨナを運んだ。

ヨナはたくさん海水を飲んだが無事だった。海を見ると先ほどまであった海中の通路はあとかたもなくなっていた。白鯨ももう姿を現さない。

遠くで少女たちの笑い声や叫び声が聞こえていた。見ると彼女らは、近くの小さな川の向こう側の浜でボール遊びを楽しんでいるのであった。ヨナはのどの渇きをいやすためにそのきらきらと海に流れ出ている浅い小川に入り水を飲んでみた。しかし潮が満ちている時だったので、塩分が強すぎた。左足のつりはもうとれてしたが、空腹、のどの渇き、それに疲労でくたくたになっており、川上のほうに歩いていく体力はもうなかった。少女たちに助けを求めるために、川から向こう側に出ようとしていると、ボールが転がってきた。そこでヨナはこれを蹴り返したが、半分も届かなかった。彼はよろけて膝を砂地に落とし、手を振って助けを求めた。しかしヨナが裸同然の姿だったので少女たちはだれも近づいてこれなかった。ヨナはしきりに両手で水を飲むそぶりを見せた。

やがて、一人の少女がうつむいたまま歩いてきて、ボールを両手で拾い、次にヨナの眼を見つめ、あごである大きな岩を指し示して言った、「おじさん、もしあの岩の後ろにいてくだされば、私たち水と食べ物を持ってきてあげましょう。」ヨナは彼女の気高い態度に驚き、すぐにその言葉に従った。

すると少女たちはヨナの隠れた岩のほうに食べ物、水、そして乾きかけの服を持ってやってきた。彼女らは小川の川口で洗濯をするために来ていたのでした。一人の少女が岩越しにその服をヨナの頭に落ちるように投げ、それがうまく命中すると、みんなは拍手し、笑いながら舞った。ヨナは急いでその服を着た。すると少女たちはヨナの高貴な容姿に感嘆した。

ヨナが与えられたものを飲食するあいだ少女たちは口々に彼に問いかけた、「おじさん、どこからこられたの?」「どうやってきたの?」「どんなお仕事をされてるの?」「まだ独身?」「どちらへ行こうとされているの?」「今夜はどこに泊まるの?」等々。しかしヨナはまだのどが回復しておらず聞き取れるような声が出せなかった。すると風向きが変わり、ヨナが風上になると、最初の少女以外の者たちは皆突然笑いながら飛び跳ねてあたりに散らばった。ヨナのにおいがそれほど臭かったのだ。ヨナは残った彼女に感謝し、神にも感謝の祈りを捧げた。

こうしてヨナの逃避行は失敗した。

第3章

神はまたヨナに語りかけました。「ニネベに行きなさい。そして人々に罪を悔い改めるように諭（さと）しなさい。もしお前が説得しえなかったらニネベのものは皆40日後に罪のため滅びる。」

ヨナは今度はすぐにニネベに向けて出発しました。

前にも述べたように、ニネベはとても大きな町で、その端から端まで行くには歩いて三日もかかるほどでしたので、町じゅうをくまなく預言して歩くのは尋常なことではありません。すべての道を歩きつくすにはたしかに40日はゆうにかかったことでしょう。ヨナは勇気を出してニネベの町に入りました。そしてアッシリア語で暗記した次の言葉のみを繰り返し唱えました。

「みなさん、罪を悔い改めましょう。神を畏れて悪いことはやめましょう。もしみなさんが、今

のままの罪多き生活をし続けたら、40日後には、この町は滅ぼされてしまいます」

もちろん40という数字は毎日1ずつ減っていきますので、彼はアッシリア語で40からのカウントダウンも言えるように学習していました。

ヨナは幼年期に体験したショックによるトラウマのため、ニネベの人々への強い恐怖心を抱いていました。しかし自分には神がついているのだと何度も自分に言い聞かせ勇気を固持し、語り続けました。しかし誰もヨナを相手にしませんでした。ヨナが近づいてくると、「臭い！」と人々はヨナに唾を吐き掛け、近寄らせませんでした。ものを投げつける人もありました。もちろん家に招き入れる人もありませんでしたので、夜はいつも野宿でした。それでもヨナは神に命じられたとおりのことを人々に語り続けました。

ヨナがニネベに来てから34日が過ぎた。しかし、ヨナの警告に耳をかそうとする人はまだひとりもいない。人々は相変わらず、神を恐れず、人をだまし、盗み、悪意を本意とした。よって自らをますます愛することができなくなり、他人への怒りがさらに強まるという悪循環を繰り返した。さて、ヨナと難破しかけた船に同乗していた材木商人がレバノン杉の商談でニネベ王に招かれていて、その日ニネベに着いた。すぐに宮殿に赴いて自らの到着を報告し、翌日王と会見することになった。指定された迎賓宿を探していると、ある方向に進む群衆に遭遇し、これについて行くと、神殿の境内に入った。そこではまさに男子を生贄（いけにえ）にする儀式が始まろうとしていた。

このとき材木商人に、荒れ狂う嵐の情景と、ひとときの平和、それに続いて神のニネベ警鐘の命に背いた預言者ヨナがクジラに飲み込まれるすさまじい光景が鮮明に蘇ってきた。そしてヨナが話した神のニネベ壊滅計画のことも思い出した。その時、男の子が死にもの狂いで泣き叫び始めた。商人は、その子が覆面をした祭司らにより殺害され丸焼きにされるのを目の当たりにした。群衆は異様なうなり声をあげた。漂ってきた肉煙のにおいに商人は吐き気を覚え、ニネベが今にも神により滅ぼされるのではなかろうかと恐れた。そして向かい側の神殿の扉の上に立つやせた体にみすぼらしい服を着た男が両のこぶしできりに自分の胸を打ち何やら泣き叫んでいるのに目をうばわれた。それは鯨に飲まれて死んだと思っていたヨナだった。商人は驚き、彼の名を

呼び、預言者のほうに行こうとしたが、立ち去ろうとする群衆の流れにはばまれ、そうこうしているうちに塀の上からヨナの姿は消えた。彼は思った、「ヨナの幽霊がここに来ている！さてはニネベの壊滅を預言させるためにヨナの神が彼の幽霊をついにここに引き上げたまいしか！ありやあ、わしゃあ呪われたもんよ！二度も同じ神の手中（しゅちゅう）におちいるとわ！」

商人は神殿の境内に残った男たちに、塀の上で泣き叫んでいた男のことを聞いた。彼らはその男が、ひと月くらい前から町にいるヨナという托鉢僧であり、施しを受けるために家々を回り罪の悔い改めとニネベの滅亡を預言し続けていること、そして他の托鉢僧と異なり、かなり魚臭く、いかなる神像をも拝まない者であることを話した。そこで商人は実は自分はヨナを知っていることを明かし、ヨナが鯨に飲み込まれるまでの一部終始を人々に語った。しかし信じてもらえず、特に鯨が白かったということを行ったことにより、かえってニネベの守護神である半魚神ダゴンに冒瀆するとして祭司たちにより監禁されそうになった。幸い王からの招待状を持っていたので罰金を払うだけでのがれることができた。

その夕、彼は宿の主人からヨナのいそうなところを聞き出し、探しに出た。夜警にも門番にも金を与えてヨナの居場所を聞き、町はずれにゆき、やっとのことで彼を探し当てた。ヨナは、岩を穿（うが）って作られたばかりの墓穴（はかあな）の中で祈っていた。商人は、自分がだれであるかを知らせ、彼にニネベが神に滅ぼされる前に一緒に逃げようと誘った。しかしヨナが断ったので、世の明けぬうちにひとり人知れず町を去っていった。

それからすぐに、ヨナが白い鯨から吐き出されたのだといううわさが広まり始めた。彼が臭いのはそのためで、顔色が妙なのは鯨の胃液で漂白されたのだと。そしてそのうわさのみなもとである材木商人が王との商談に入る前に、密かに夜逃げしたこともニネベの人々を不安がらせた。そうしてもしかしたらヨナは本当に神の預言者かもしれないぞと案ずるようになってきた。

罪を悔い改めるように、もしそうしないとニネベは滅ぼされる、と毎日同じことをたどたどしいアッシリア語で繰り返し言いながら、みすぼらしい格好で町をくまなく歩く異国人ヨナの姿を見て、人々はだんだん不気味な気持ちになってきました。自分たちの悪行・罪を重々自覚しているのですますます得心（とくしん）できるのです。ヨナの履き物はぼろぼろになって、足の爪

は内出血のため赤黒くなっていました。ヨナは初めは大きな声と大きな身振りで預言していましたが、やがて声はつぶれ、身振りも弱々しくなり、ついには近くでかろうじて聞き取れるくらいのかすれ声となり、歩みも杖を突かないとできないようになりました。

人々の間で罪の悔い改めが始まったのは、そんなヨナの声がとうとう出なくなり、ただ口をばくばくさせるだけになったときのことです。長らくヨナの様子をそばで見ていたひとりの男が、まるで人形腹話術師のように、ヨナの口の動きに合わせて、ヨナがそれまで繰り返し言っていたことを、初めは小さく、やがて大きな声で言い出したのです、「みなさん、罪を悔い改めましょう」と。

それからというもの、罪を悔い改める人がひとりふたりと増えていき、その人たちもヨナについて歩き、「みなさん、罪を悔い改めよう」とヨナの声となって訴え始めました。そして、38日目には町中が罪を悔い改めようと言う声でみなぎりしました。断食をする人、灰をかぶる者、祈る人たち、それを取り囲む人混み、この様子が町のどこにでも見られるようになりました。悪いことをするのを見つけられた人たちはすぐに人々に取り囲まれ、悔い改めるように諭（さと）されました。あちこちで偶像神が倒され焼かれた。また、子供を生け贄にする儀式も人々によって妨害に合い、儀式を司っていた祭司長こそ生け贄にされそうになったので、彼は命からがら逃亡しました。

この実状はすぐにニネベの王の耳にも届きました。人々が悪行をやめるようになることは王家にとってはもとより好都合でした。しかしじきに人々は王も罪を悔い改めるようにと要求して宮殿に押し寄せて来ました。たくさんのプラカードが門に集められました。もし王が民衆の前で罪を悔い改めなければ、今にも暴動を起こして宮殿に乱入してしまいそうな勢いでした。ニネベ王は身の危険を感じ、すぐに人々に自らも罪を悔い改めようと言いました。そして群衆の前で、王服を脱ぎ捨て、灰をかぶりました。大臣や貴族そして宮殿の召使いたちも皆王に習って悔い改めをし、衣服を焼き、その灰をかぶり、祈りました。

39日目の朝、ニネベ王は、ニネベ中に断食、そして水も飲まないようにというお触れを出しました。さらに続けて、40日目には、灰をかぶり声を上げて神に許しを請うように、今後一切悪

は行わないと神に誓いをたてるようにと命じました。

人々はそれに従い、いよいよ40日目には町中は神に対する祈りの声と、神を称える音曲で満たされました。そしてその運命の日は、ニネベで誰ひとりとして神から罰を受けることなく、平和に過ぎていきました。ヨナは神の命令を全うしたのです。そしてその日、いつしかヨナの身体から鯨の臭いが消えており、彼の顔の漂白された部分は赤みを取り戻し始めていました。

人々はこの運命の日に自分たちが無事とわかると、ヨナのところに集まり、始めはうやうやしく近づいて平伏（へいふく）するのですが、彼が臭くなくなっているのを知ると、足もとで平伏する人、洗髪してあげる人、香油で洗足してあげる人、新しい履き物を差し上げる人、さらには立派な衣服に着替えさせる人もありました。

日没に断食の命令が解かれると、人々は祝杯を挙げ、やがてお祭り騒ぎになりました。ヨナにも酒や肉料理が与えられ、立派な月桂冠が頭にかぶせられました。

やがて宮殿から使者が来て、王が預言者ヨナの労をねぎらい感謝の意を表したいので宮殿に来られたいとの招聘（しょうへい）を伝えた。すぐにたいまつ行列ができ、「くじらから復活したヨナ！神のみつかいヨナ！」という合唱が始まりました。人々はヨナをロバに乗せて行列の真ん中を行かせ、宮殿のほうに進みました。彼を祭司長にするよう王に請願しようとの声が上がると、こんどは「新しい祭司長ヨナ、くじらのはらからヨナ、バンザイ！」という合唱になり、笛や太鼓が鳴り響き、それに合わせて踊りも始まりました。

しかし、ヨナはその時、言いしれぬ寂しさと虚しさに胸が締め付けられていました。

ヨナは思った。

「私は、しかしこの40日の間、ニネベのこの人々が救われることを本心から望んでいただろうか？否、自分はただ神を畏れ、神の命令に忠実であろうとただけではないか。それも神から逃げられぬとわかったからだ。私がニネベの人々を愛していたかという、答えは否だ。私はニネベの人たちを愛せない。父も母も彼らの手によって殺されたことを一時も忘れることができなかった。私が臭いので彼らが近づいてくれなかったのをむしろ好ましいことと信じていた。ただ、40日間に限って神の命令に忠実であろうとただけなのだ。いってみれば自分は神に操（あやつ）られた人形に過ぎなかった。ニネベの人々が滅びようが生かされようが、私にはどちらでもよかった。ただ、神が私を操られるとおりに踊りしゃべる有能な人形であればそれでよかった。

「私が神を愛しているかという、それは間違いないことだ。あの鯨のはらわたの中でのたうち回りながら祈りに祈った私に答えて救い出して下さった神に感謝し、神の御心（みこころ）に自分のすべてを賭けようとしたのだから。それでいてこの虚しさ、淋しさは何だろう。この人たちが味わっている今の喜びを共に味わうことのできない私はやはり人形だ。劇が終わって観客の喝采を受けて、舞台上で丁寧に辞儀をする人形だ、その辞儀さえもただ操り糸が一瞬ゆるむので頭を前倒しているだけだ。心はそこにはない。だからこのニネベの人たちの歓喜の音が私を少しも喜ばせないのは当たり前なことだ。神よ、あなたから逃げようとしていた私はまだ人間だった。しかしニネベに来た私は人形になっていた。そうだ、あの時一緒に鯨に飲み込まれたあの木人形といっしょだ。あれは鯨のはらわたの中でも、うごめく動物たちにもまれて愉快そうに踊りまくっていた。

「神様、あなたは私を用いてこの邪悪なニネベを救われました。それも40日間も彼らに悔い改めの猶予を与えられたのです。でもニネベの略奪者が私の町に攻め込んできて父と母を私の目の前で殺戮したとき、あなたは父と母を救おうとされなかった。一瞬のうちに彼らが父と母をたたき殺すのを許された。それなのに私をニネベの救いに用いられた。私にはあなたのなされることもうまったくわけがわかりません。

「私は、ニネベの人がひとりふたりと悔い改めていく姿を見て確かにうれしかった。しかしそれ

はニネベの人が救われると思ったからではなく、私があなたに喜ばれる仕事をする事ができたという実感からくる喜びでした。そして自分にもできたのだという満足感でした。しかし、神様、あなたもご存じのように私の行為は愛の行為ではありませんでした。なぜなら私は今彼らが救われたことをむしろ残念がっているのですから。ニネベは救われる資格なんてなかったはずなのに何で神様はニネベを救われたのだ、と。」

やがて行進が宮殿に近づくとつれ人々の合唱は言葉の統一を失い、叫び声となり、音楽もハーモニーがなくなり、踊りはリズムを失った。そして人々の声が高まるにつれヨナの寂しさは怒りに転じた。

「それにしても彼らの馬鹿騒ぎときたらしゃくにさわる。ああ神様、この人たちはなぜこんなにまで馬鹿騒ぎをしなくてはいけないのです。もっと静かにあなたに感謝すればいいのに・・・そうだ、これだ！この狂気だ！彼らが私の生まれ故郷を略奪したときのあの野蛮な勝ち鬨（どき）の騒ぎと同じだ！

「神様、やはり私が前にも申しましたように、この民は滅ぼすべきだったのです。あなたが今日救われたこの民は今にまたきちがいじみた悪行を繰り返す愚民に逆戻りしますよ。この人たちはもうあなたのことを忘れてしまっています。へたをするとこの私を神に仕立てかねません。ほら、聞きましたか、この人は私がニネベの祭司長になった暁には祭司にしてくれと頼み始めている。やはり彼らの悔い改めは一時しのぎに過ぎません。いや、最初に悔い改めて私と一緒に歩いた一握りの人たちは、まことの人たちでしょう。しかし彼らはどこに行ったのでしょうか。あの人たちが喜ぶ姿を見たら、この私でも一緒に喜べたかもしれないのに・・・え、もしかしてあの人たちは！・・・

「神様、この人たちは私を祭司長にせんと、宮殿に向かっています。しかし、どっこい彼らは宮殿に入るやいなや、私を投げ捨て、王家の宝物を略奪し始めるでしょう。その証拠に、ほら、門の飾りを外してもう奪い合ってます。神よ、もうやめましょう。この民は生まれつきの悪人なのです。

「今からでも遅くはない、どうぞこの民を滅ぼして下さい。私は朝には町の外れに逃げておりますので。そうでなければいつそのことこの私を殺して下さい・・・あ、何という恐ろしいことを私は思っているのだ、神様お許し下さい・・・私はうわごとを並べ立てていたようです。」

するとヨナは、神の声を聞いた。「ヨナ、お前の怒りは正しいものであろうか？」

「神様、・・・正しくはないでしょう。でも私の怒りはどうしても抑えることのできないものです。私にはやはり父と母を殺したニネベを許すことができないのです。そしてそれが神様に仕える身の最たる不幸であることも知っていたのです」

『以下、旧約聖書「ヨナ伝」第4章5節－11節』

その後(のち) ヨナ町の東方(あがりかた)に出(いで)て腰を据(す)へる 自(みずか)らに益(えき)せむとて庵(いほり)をば結び その陰に座りて町の如何(いかん)を見守る しからば御神(おんかみ)エホバ 一本の瓢箪(ひょうたん)の木をによきによきと伸ばし賜へば ヨナの頭上に緑葉茂りて陽光をば遮(さえぎ)りたり よりてヨナ彼(か)の瓢箪を非常の喜びとて楽しむ

しかれど御神 翌日の明け方一条の毛虫に命じて瓢箪の木の葉を遍(あまね)く嚙(か)ませ賜へば 彼(か)の瓢箪の木一葉も残さぬ裸木となりにけり

さて陽の出(いで)たる折しも御神東方より熱き風を呼び起こし賜へり 直光ヨナの頭(ず)を容赦なく射たれば意識朦朧(もうろう)となりてヨナ御神に祈願して曰く 我はもはや生きるに忍びず 死ぬこそ本望なり

されば御神ヨナに問へり 汝(なんじ)は瓢箪にかこつけて死を望むほどに怒(いか)りたるかや

ヨナの応(いら)えて言ふよう 然候(さんぞうろう) 死を望むほどに怒りて候ぞよ

かくしてエホバ神曰く あな有り難や 汝は自らが作りたるにあらざる瓢箪の木を死ぬほどに惜しむとは 一夜にして育ちし瓢箪の一夜にして枯れるがごときを以て死ぬると申すか 然(し)からば汝は我が心持ちを多少とも悟るべし 彼の大きいなる町ニネベをよくよく見よ 善悪の分別能(あた)はざる民(たみ)十二万余ここに住み居り 加へておびただしき家畜在り これを遍(あまね)く創造せし余がこれを間々(まま)惜しみていかでか失笑をば招くべし

終わり

追記

『神の 御子(みこ)を世に遣(つか)われしは 世の裁き(さばき)のためにあらず、御子によりて世を救わむとするがため也(なり)』

(新約聖書「ヨハネ伝」第3章17節)

長光一寛

2014-6-1st

第一章へ <http://p.booklog.jp/book/55689/read>

photos: amazon.com/author/nagamitz-kazuhiro